チベタン・チルドレンズ・プロジェクト
2015年 運営報告書

2015 年決算の解説

2015 年の決算については前頁の通りです。当年は大地震や経済封鎖などもあり非常に厳しい運営環境でしたが、当期収支は 253,229 円の赤字に留まりました。

施設別に見て行くと、昨年と比較してクンデ・ハウスは、支出が 1,112,830 円増加しました。その理由のほとんど全てが、地震と経済封鎖による物価の上昇に起因しています。また本年も昨年に引き続き教育に力を入れたため、教育費やスタッフ給与に計上しております家庭教師の支払いなども増加しました。

チベット予防医学室は、昨年は 447,138 円の収益を上げておりました。大半が外国人の診察代金にチャージした寄付金と、海外向けのお香、薬湯などの物品の販売によるものでしたが、本年は地震と経済封鎖により外国人の訪問が減り、20 万円以上も収入を減らす結果となりました。

ネパール現地事務所の支出の主な項目は、税金、及びネパール産業省の監査費用とそのために弁護士に依頼した書類製作費です。東京事務所の支出は、ネパール現地からの依頼で購入した衣類、日用品などの支援物資、プロバイダの契約更新費、国内、国外郵便送料と封筒などの資材代金です。

2015 年運営の報告

2015 年の運営を振り返り、解説を加えたいと思います。
1 年間の主な出来事を右にまとめてみました。

時系列順に、出来事をご報告させて頂きたいと思います。

2015 年の主な出来事

3 月	インフルエンザ感染
4 月	クンデ・ハウス全員進級
	ネパール大地震の発生
5 月	大規模な余震の発生
9 月	新憲法公布
9 月以降	物資の不足

インフルエンザ感染

本年は地震など大きな受難の年であったため、インフルエンザがまるで些細なことのように思われるかもしれませんが、3 月末に学校で感染した児童が出て以来、歯止めの効かぬ勢いでクンデ・ハウス内にインフルエンザが流行し、収束までに 1 か月近くを要しました。

例年は、チミの里親さんである松山先生が理事をされている「ヒマラヤ眼科耳鼻科医療を支援する会」の医療チームがネパールに来られた際に、インフルエンザの予防接種を実施して下さっているのですが、今期はたまたまその機会を逃しており、感染してしまいました。

殆どの子どもが 39.5 度以上の熱を出し、激しい嘔吐に見舞われました。体力のある男子は比較的すぐに治癒しましたが、もともと気管支の弱い子どもは、回復しかけては 2 度 3 度と熱をぶり返しました。特に年少の子ども達は重症化し、松山先生や地元医師のアドバイスを仰ぎながら、何とか猛威が過ぎ去るのを待つばかりでした。発症後期には解熱剤を使用しましたが、これによって胃が荒れて一層の食欲不振を招いてしまい、女子と年少男子は目に見えて明らかなほど体重を減らしてしまう結果となりました。

スタッフも全員が感染し、この様な時に限って短期のアルバイトも人材が確保出来ず、子ども達のケアでどうしても無理をしてしまうため、長く完治しない状態が続きました。

クンデ・ハウス全員進級

4 月下旬の新学期には、クンデ・ハウスの全員が新しい学年に無事に進級しました。ネパールの学校は一般的に、進級テストに合格出来ないと小学校でも留年になります。苦手なネパール語の試験など、いくつか追試が必要だった生徒もいましたが、ひとまず無事に全員が新しい学年に進むことが出来ました。

ネパール大震災の発生

4月25日11時56分にカトマンドゥの北西77Km、カンダギ県ゴルカ郡を震源とするMw7.8の地震が発生し、この地震により8,900名以上の方が亡くなられました。

突然、地鳴りがし、突き上げるような強い揺れに襲われました。外に逃げる事が不可能なほどの揺れでした。女子はクンデ・ハウスにおり、男子の大半はチベット予防医学室へ製薬の手伝いに行っていました。地震の発生日は、ネパールの休日に当たる土曜日であったため子ども達の学校はお休みで、TCPのみならず一般の家庭も、比較的家族が離散しない状態であったことは不幸中の幸いでした。

クンデ・ハウスの建物には甚大な被害はなく、食器棚の戸が開き、いくつかの陶器が落下して割れただけでした。診療所では戸棚に並べられているガラス製薬瓶の多くが落ちて割れ、建物自体にも亀裂が見られたため、アムチに連れられてクンデ・ハウスに避難しました。周囲を見回すと全壊した家は少ないが、多くの家で窓が割れていました。

強い余震が頻発するため、たくさんの人々が屋外に避難していました。TCPも結局この日、夜を駐車場の空きスペースで過ごす事にしました。この日以降も昼間は外で過ごし、夜寝る時にだけ建物内に入る生活がしばらく続きました。

発生直後から電気が不通になりましたが、幸いなことに5時間後にはネパールと日本で電話が繋がり、全員の無事を確認できました。クンデ・ハウスの地域では、ドゥゲンダラで家屋が倒壊して電線が切れたため、電気の復旧までに2週間以上かかりました。その他の地域は2～3日で復旧していました。

震災翌日からは、スタッフは飲料水と食料の確保に奔走しました。幸いな事に、ご近所の小さな店舗で少しづつ食品を売ってもらえたこともあり、食料に関してはそれほど危機的な状態にはなりませんでした。飲料水に関しては電気がないため井戸の水が汲みあげられず、子ども達がペットボトルを持って村の共同の湧水に水を汲みに通いました。飲料水に関しての状況はどの家庭も同じで、長い行列が一日中絶えることなく続きました。そんな中、子ども達は緊急性をよく理解し、余震の不安の中、懸命にさまざまなお手伝いをしてくれました。

クンデ・ハウスから一番近い場所にあり、いつもお世話になっていたスーパー「ルンバ」が全壊したため、毎日アムチはガレキの撤去作業に通いました。当時、建物内には17名がいたとの事。鉄筋コンクリートのスラブが折り重なって倒壊している現場では、重機なしにはほとんど作業は進まず、ご遺体を取り出すことが出来ませんでした。

各国の支援もあって、物流は予測よりも早い時期に回復したため、食料に関して飢えるような状況にはなりませんでした。飲料水に関しては、ボンポ・ゴンパ（近くのチベット寺院）に給水車が来るなどしたため、急場をしのぐことは出来ました。学校は結局1か月にわたって休校になり、5月31日から再開されました。

余震や山鳴りが続き、子ども達は常に緊張状態にありました。特に数名の女子は過敏になり、精神的なストレスにより微熱が長く続きました。地震後はどのような危険があるか予測できず、クンデ・ハウスの外に出る事を禁じたため、元気盛りの男子はパワーを発散させる場所が無くなりケンカが増加しました。食べる事が唯一の楽しみとなったため、出来る限り工夫をし気分転換が出来るようにしました。これまでの食生活と比較するといわゆる「プチ贅沢」な状態です。サポーターさんのご支援があるからこそ、こうして子ども達を飢えさせないでいられる事、少し高くても必要なものを買う決断が出来る事が、地震後の混乱期あって何より現地スタッフがありがたいと感じた事です。改めまして皆様方のご支援に御礼を申し上げます。

TCPは今回の地震に際して、ネパールに拠点を持つ団体として何ができるかを考え、「ヒマラヤ眼科耳鼻科医療を支援する会（EArTH）」と共同でネパール緊急支援を行いました。EArTHはこれまで現地で活動実績のある医療系団体であり、現地での運営費を借用する形で地震直後から活動をはじめました。同時に日本では、4月27日から緊急支援のための募金を開始しました。6月末日の活動終了までの間に6,055,217円の募金が集まり、このうち6,049,254円を医療、医薬品、飲料水、食料、日用品の提供に使用させて頂きました。現地では9班のチームが、自らも被災者であるにも関らず大きな余震の起こる不安な状況の中、利他心のみで活動に参加してくれました。地震に関しての支出については、運営報告書の最後にまとめておりますのでご覧ください。

TCPの賃貸物件ではないためご報告しておりませんでしたが、代表がお住まいのパルピンの僧院が、今回の地震により大きくダメージを受けて、居住が不可能な状況になりました。震災以後はテントで生活をされています。代表は地震の前から、修行に最も適した環境について熟考されており、より行を深めたいと思っておられました。

今回の地震で住居を失った事もあり、これを機に適切な時期にチベットに戻り、かの地から世界の平和を祈念することに専心したいとのお考えです。多くの僧や行者が口にするように、やはり修行にとって最も適した土地はチベットなのです。現在、亡命チベット人の帰還について中国政府は、有名な人物でない限り罪を課さないのが現実です。いつチベットに戻られるのかまだ決まってはおりませんが、代表のお考えがこの様なものであることをお伝えしておきます。スタッフの大きな心の支えであった代表がチベットに戻られる事は痛手ですが、行者として最も有益な形で世界の平和に貢献したいという信念のゆるぎなさに敬意を表して、その時期が来た際には、ご無事に帰還される事を一心に念じてお見送りしたいと考えております。

大規模な余震の発生

大震災はネパールに大きなダメージを与えましたが、各国からの救援や支援もあり、ほどなく人々は復興について前向きに取り組み始めました。もう一度あのネパールを取り戻すのだ、という気概が誰からも感じられました。しかし、4月25日の地震から18日目（5月12日）に起こった大きな数回の余震は、ネパールの人々の心を完全に打ちのめしました。

この日を境にネパールのムードは一変しました。「もうダメだ」というあきらめの気持ちが大きく国全体を包んでしまいました。カトマンドゥの人口も1/3まで減少し、街が閑散としました。ネパール人は、地滑りや土砂崩れで田舎の山岳部が危険とは言っても、平屋や2階建ての簡易な建物だとすぐに外に避難できるためカトマンドゥの密集した住環境より安全と考え、先を競っての首都大脱出となったのでした。バスなどの運行も見込めない為、郊外へ人の行例が何十キロにもわたって絶える事がありませんでした。

皮肉なことに首都の人口が激減したため大気汚染が緩和され、久々に美しくヒマラヤ山脈が見渡せるようになりました。消費電力が減ったため、電気も24時間供給されるようになりました。

この余震が与えた経済的な損失は大きなものではなかったかもしれませんが、人々の心に与えたダメージは計り知れません。

大規模余震後の5月21～26日、東京事務所の石川は夫とともにネパールに滞在し、TCPの建物（クンデ・ハウス、チベット予防医学室）、バヌバクタスクール、カトマンズ武道館、日本人学校及び、チベット人、ネパール人、日本人の個人宅を可能な限り廻り、建物の被災度判定を行いました。二人とも1級建築士であり、特に夫は構造の専門家で応急危険度判定士の資格も有しているので、地震国日本の基準で建物の被災度を判定し、各建物のオーナーまたは使用者に対して今後の建物使用と補修に関するアドバイスを行いました。TCPの建物に関する被災度判定については、2015年5月27日のブログに写真付きで解説していますので、ご参照下さい。

TCPの建物に関して3カ所の補修箇所を決定しましたが、このうちの1ヵ所（駐車場のレンガ積みの塀の補修）は、地震後の材料と人手の不足、その後に起こった経済封鎖による混乱で、2015年末現在も補修が完了しておりません。

新憲法公布

9月20日、ネパール新憲法が公布されました。ネパールは2008年に立憲君主制を廃止し、連邦共和制へ移行することが決議されました。当初は2010年までに新憲法を公布する予定でしたが、政党間で激しい対立が起き、実に8年にもわたって臨時憲法で国を運営してきました。4月の大地震を受け、ネパールの団結が急務であるとの考えから、やっと新しい憲法の公布が行われたのでした。多くの国民はこの時点ではある程度、新憲法に期待を寄せていました。

新憲法は、これまでの州の分割を見直し7州に再編成するなど、多民族、多言語、多宗教のネパールの多様性に即したものになるはずでした。しかし「マデシ」と呼ばれる南部のインド系の住民が新憲法下での不利益を主張するなどし、インド系の住民を介してネパールの政治に影響力を残したいインド政府により、物流の停止などいわゆる経済封鎖が行われ、多くのエネルギー、日用品、食料をインドからの輸入に頼るネパールは、たちまち困窮する結果となりました。

物資の不足

インドによる経済封鎖はネパール国民の生活を激変させました。エネルギーの供給停止は特に影響が大きく、人々が何キロにもわたって販売店の前に徹夜で行列を作りました。ガス、ガソリン共に最初は全く手に入らない状態でしたが、年末ごろには闇販売のルートが確立される状況になりました。それでも供給量が少ないため日常は薪で調理をし、緊急時以外は遠くても徒歩と言う状況です。ガソリン不足のため、スクールバスもいつ運行が停止されるか分からない状態です。在ネパール日本大使館によると、この状況は今後もしばらく続くという分析です。

その他のご報告

ここでは、この1年の大きな出来事以外に、サポーターの皆様にお伝えすべき内容について、ご報告をさせて頂きます。

3月のある日、突然にダワの親族と名乗る方からお電話があり、面会を希望されました。その後、数日の間に今度は、アポイントなしで直接クンデ・ハウスにいらっしゃいました。遠い親族と名乗るその方は 20 代半ばの若い女性で、ダワを外に連れ出して話したいとの希望でしたが、親族であるのかどうかの確証がなく（ダワに確認したところ、本人の記憶にはない人物とのこと）、また加藤が不在時でしたのでアチャ・イシの判断で、クンデ・ハウスのガーデンで面会をしてもらう事にしました。ご親族の方は、クンデ・ハウスの暮らしぶりを非常に貧しくみすぼらしいとおっしゃり、話の流れからするとダワを引き取りたいとお考えのご様子でした。1 時間ほど黙って話を聞いていたダワでしたが、ついに口を開き「困った時には見捨てて、都合よく会いに来ないで。私の家はここだから、もう会いに来ないで」と激しい口調で言い放ちました。

どの子どもも、クンデ・ハウスに入居するまでには個別の事情があり、詳細はスタッフが把握しておりますが、それらについて子ども達に話したことはありません。この部分は非常にデリケートな問題で、子ども達自身もそれらの理由が明るい内容でない事は察しており、積極的に聞いてくる事もありませんでした。そのために、TCP に来たことを子ども達自身がどのように理解し、実際はどう思っているのか、突き詰めて話し合ったことは無かったのです。

ダワが感情をあらわに、ここまではっきりと自分の所属意識を明らかに言葉にして表現したことは、スタッフにとって大きな驚きでした。と同時に、これほどまでに強くクンデ･ハウスを唯一自分の家だと思ってくれている事を、正直嬉しく思いました。

皆様のご支援のお蔭で、整った教育環境のもと、子ども達は様々な能力を伸ばしてきました。日本式の礼儀作法が身に付いているため、ネパールでは大変躾が行き届いているとの評価を受け、学校の先生方がわざわざご見学に見えるほどです。炊事、洗濯、水汲み、掃除なども年齢に関係なく当番制で分担しているため、生活能力も高いです。いろいろ事情がおありかと思うのですが、今回の件に限って言うと、ご親族の方がダワに求めているのは即戦的な労働力の様です。今後もこのような問い合わせに対しては、子ども達の幸せな未来に確証のない限り絶対に応じません。

またこの様な TCP に対する所属意識はダワだけでなく、子ども達全員の中に強く育っていることを感じます。特に女子はダワ、パサンなど年長者を中心に「将来は自分たちが TCP を運営して行く」と決意を語ってくれます。成績の良いイシは得意な勉強を頑張って「外国で働いて運営費を仕送りする」のだそうです。クンサンは「TCP の学校を設立して、恵まれない子ども達に勉強を教える」と言っています。バヌバクタスクールで、ネパール国内において非常に生活が困難な人たちがいる事を学んだこともあり、難民とは言え自分たちが非常に恵まれた環境にある事に感謝し、他者のために働きたいという意識が芽生えてきている様子です。

９月には、在ネパール日本大使館の小川大使ご夫妻がクンデ・ハウスをご訪問下さいました。これまでも設立以来、大使館職員の方がボランティアで日本語教師をお引き受け下さったり、アムチの診療所をご利用下さったりと、大使館の方々とは様々な交流の機会がありました。今回の訪問はその職員の方々のお口添えによって実現したもののようです。貴重な機会ですので、カトマンズ武道館の補修工事と、今後もネパールで日本の武道が発展する様に、JICA による剣道講師の派遣をお願いしました。

剣道が好きで仕方のないクンデ・ハウスの男子達は、これまで熱心に武道館の剣道教室に通ってきました。道場のネパール人講師から、剣道の道具の老朽化と不足に関して相談と要請があり、一昨年より日本で剣道道具を集めるために様々に声掛けを行いました。この呼びかけに日本剣道振興協会の理事の方がお応え下さり、個人でたくさんの道具をご寄附頂きました。このご寄附に勢いを得て、益々剣道に精進する子ども達でしたが、指導員の方々のご実家がいずれも地震で被災されて郊外に引っ越しをされたため、ガソリン不足もあいまって指導者が武道場に通う事が出来ず、震災後、剣道教室は再開の目途が立ちません。このため暫定的な処置として、同じ武道場で開催されている柔道教室に子ども達の席を移しました。ペマはその身軽な特性を生かして、体操教室にシフトさせました。しかしながら経済封鎖によるガソリン不足で、道場に通う手段が確保出来ず、９月以降は長らくお休みしている状態です。

震災後、山岳部で被災された住民の方々が、村などのまとまった単位でカトマンドゥの広場や空き地に避難されています。特にチベット系の住民からはアムチの巡回診療を要請されますが、規模が大きく無料でご提供する医薬品の負担が莫大なものであることから、全てには応じられない状況です。

地震以後ネパール国内から、チベット人２世、３世の子どもの引取りの打診が６名ありました。村が壊滅してしまったランタンからのお問い合わせもあり、着の身着のままでお越しになる被災者の姿を目にすると、どんな苦労をしても何人でもお引き受けしたい気持ちに駆られましたが、実際のところは運営上、現段階でお引き受けすることが難しく、食料と衣類をお渡しし、涙をのんでお断りしました。

これまでクンデ・ハウスは「亡命してきた孤児」という基準に基づいて身元を調査した上で、子どもをお引き受けしてきました。非常事態であるとは言えこの枠組みを、一気にネパール国内で生まれた２世、３世にまで広げるのは大きな危険を伴います。一人を引き受けるとたちまち噂は広まって、収拾がつかなくなります。既にクンデ・ハウスは高いレベルの教育が受けられると一部では評判になっており、全てが無料であるならば多少の嘘をついてでも子どもを預けようとお考えの親御さんもいらっしゃいます。

お困りの方々を目の前にして、お断りしなければならない現地スタッフの心も毎回、血を流すような苦しさです。しかし感情に流され無理を押して、本来の運営が立ち行かなくなっては意味がありません。チベット予防医学室の無料巡回診療も孤児のお引き受けも、冷静な判断で対応できる範囲を見定め、可能な事は実施して行きたいと考えております。

2014 年 11 月よりクンデ・ハウスの仕事の傍ら美容学校に通い、様々なスキルを磨いてきたアチャ・イシが、最終試験に合格し修了証を手にしました。慣れないネパール語での試験など苦労もあった様子でしたが、最後まであきらめずに過程を終了しました。

アチャ・イシの今後の進路については、可能性に溢れた 20 代の若さを生かし、スキルを磨き、社会に出て自立できる事が重要だと考えて来ました。そのために美容学校にも通ってきました。今回の修了証の取得を機に、既にアチャ・イシはインドでの就職を具体的に考えています。昨年からのネパールの状況も考え合わせると、やはりインドでの就職はアチャ・イシにとって非常に良い判断だと思います。

社会人としてクンデ・ハウスの子ども達のお見本となれるよう、しっかりと自立した生活をして欲しいと思います。具体的な時期が決まりましたら改めてお知らせいたします。

毎年、複数のメディアから取材のお申込みを頂きますが、2015 年はテレビ撮影の依頼 2 件（いずれもテレビ東京）、ラジオの出演依頼 1 件（NHK 国際放送）を頂きました。取材の趣旨が TCP にそぐわないものと判断し、いずれもお断りを致しました。

メディアに取り上げられることは、飛躍的に知名度を上げると予想されますが、同時にチベット支援という性質上、様々なリスクも考えられます。そのため TCP は基本的に露出に関しては慎重な姿勢を貫いています。取材する側と十分な信頼関係が構築でき、チベット人社会にとって明らかに利益があると判断される場合に限り、お受けしたいと考えています。

運営報告書は、TCP の運営の歴史の記録としての機能も兼ねておりますので、どうしてもこの記録に名前を残しておきたい萩川圭代（はらいかわ かよ）さんについてご紹介をさせて頂きます。

圭代さんはカトマンドゥ市内に、ネパール人のご主人と設立された The Atlas Export という会社を経営されている日本人女性です。誠実なお仕事ぶりで業績を伸ばし、日本人でネパールとの取引をされている方ならその名前を知らぬ人はいないほど有名な会社です。また在ネパール日本人会の肝っ玉母さんのような存在で、スタッフ加藤の親友でもあります。これまで TCP は様々な形で彼女にお世話になって来ました。

バヌバクタスクールへの転校の際、その流暢なネパール語と高い交渉力で、クンデ･ハウスの全員入学と授業料の一括納付を条件に、30%の授業料の割引交渉を学校側と成立させて下さったのは圭代さんでした。得意なミシンの腕を生かして、甚平をはじめとする子ども服の製作を手伝って下さった事もありました。ネパールの伝統文化に関する宿題が出た時、スタッフに代わって子ども達を指導して下さった事もありました。この他にもさまざまなネパールの常識などについて常に細かくフォローして下さり、どうしてもネパール人コミュニティーとは縁が薄いチベット難民の組織である TCP を、設立の頃から様々にサポートして下さいました。

昨年の暮れから体調を崩され、様々な治療の甲斐なく、6 月 12 日永眠されました。小学生のお子さん 2 人を残し、まだ 40 代と言う若さでした。最後までアムチを頼ってチベット予防医学室の診療所にも通って頂いておりましたが、特に地震後はその激しい混乱状態から、治療に用いる特殊な薬剤の原料が入手できず、ベストな治療をご提供する事が叶いませんでした。

生前に頂いた数々の貴重な貢献をサポーターの皆様にご紹介させて頂くとともに、圭代さんの魂が安らかであることを、共にお祈り頂けます様にお願いするものです。

2015 年 12 月末現在のサポーター会員は、里親サポーター 16 名、月間サポーター 39 名、年間サポーター 13 名です。地震、経済封鎖と大きな出来事が続き、運営について常に不安が付きまとう 1 年でしたが、先にも述べた通り、皆様方のご支援がいつもスタッフの大きな心の支えでした。改めまして皆様のサポートに、深謝申し上げます。

2015 年のネパールの物価は、4 月の地震、9 月の憲法公布後の物資不足により変動が激しく一概にはご報告できないのですが、12 月末現在、食品に関しては地震前の約 2 ～ 3 倍という状況です。エネルギー系では、ガス、ガソリンともに闇取引での入手で、一時は地震前の 5 倍まで跳ね上がりましたが、年末には約 3 倍という状態に推移しています。現在、ブラックマーケットでの取引が確立し、ここで既得権益を得た人達が今後、この販売ルートを手放す

とも思えず、正常な価格に戻るまでに非常に長い時間が掛りそうです。スーパーや商店でも便乗値上げが横行し、人々の生活は非常に苦しい状態です。

チベット予防医学室のアムチ、現地統括責任者の加藤ちあきには、TCP より給与は支給しておりません。また東京事務所も同様に、無償ボランティアで運営しております。これは各人の「TCP は一切が菩薩行」という仏教的な動機によるものです。

無償であっても運営自体には大きな責任を負って仕事をしておりますので、よりよい運営のためにも、ぜひ忌憚のないご意見をお寄せ下さい。TCP は熱意で行動することから始まった組織であり、スタッフは社会福祉事業に特化したスキルを持っている訳ではありません。そのため至らない部分も多いと思います。今後もぜひ、皆様のご指導を賜りたいと思っております。

2016 年の運営指針

2016 年の運営は下記の項目に力を入れたいと思います。

① 安定した運営の継続

② 子ども達の教育の充実

① 地震と憲法公布後の経済封鎖により、これまでにない物資不足と物価の値上がりを経験しました。現在も続いている経済封鎖は、日本大使館の予測によると長期化するとの事です。先行き明るい展望は何も見えては来ませんが、どのような事態が起ころうとも、情報収集に努め、出来る工夫は手間を惜しまず、倹約する部分と支出すべき部分のバランスを取りながら、安定した運営が継続できるように努力して参ります。

② しかしこのような状況の中にあっても、子ども達の教育、優れた人格を形成するために必要な体験は、昨年に引き続き積極的に行いたいと考えております。祖国を失ったチベットにとって、国としての財産は優秀な人材のみです。難民にとって一番大きく未来を変えるカギも教育にあります。子ども達がそれぞれの人生を充実したものにすると同時に、チベットの未来を明るくする希望となれるように、教育には惜しみなく取り組みたいと考えます。

子ども達の教育に関しましては、もう少し長期的な展望のお話を合わせてしておきたいと思います。

2 年前から優秀な子どもの進学先として ISAK (International School of Asia ,Karuizawa) を考えて来ました。ISAK は軽井沢にある、次世代のリーダーを育成することを目的とした全寮制インターナショナルスクールです。この学校の設立理念につきましては、HP にてご確認ください (https://isak.jp/jp/)。7 月には現地に見学に行って参りました。

現在、世界約 30 か国の生徒が在籍し、ネパールからもコパン・ゴンパの学校に在籍していた生徒が 1 名就学しています。チベット人も 3 名おり、いずれもダラムサラのチベット子供村 (the Tibetan Children's Villege) から来ています。学費は非常に高額ですが、優秀な生徒には奨学金プログラム (返済不要全額奨学金または部分奨学金) が準備されています。

学力、パスポートなどの諸問題もありますが、可能であればまずは成績優秀なイシ・パドゥンを 2 年後のサマーキャンプに参加させたいと考えております。ISAK で学ぶ事は、本人にとっても、チベット人社会にとっても、大変意味のある事だと考えております。

2016 年の年間目標は上記の通りですが、この他にも特に重要と考えている運営方針について、改めてお伝えさせて頂きます。

毎年の収支報告でお願いをしております、サポーター様のご見学の際の物資の持ち込みに関しまして、本年も皆様のご理解とご協力を賜りありがとうございました。新しくご入会を頂きましたサポーター様もおられますので、今一度、ご案内をさせて頂きます。

TCP 現地施設をご訪問の際には、ご連絡を頂きました段階で個別にお伝えをしておりますが、持ち込む物資について必ずご相談ください。またご相談の上で決めたもの以外は、どのような些細なものでも決してお持込にならないでください。

特にクンデ・ハウスでは、持込の物資や子ども達へのプレゼントを厳しく規制させていただいております。「訪問者がある＝何かいいものがもらえる」このような条件付けを、子ども達にさせないための規制であることをご理解ください。また、まだまだ物質的な豊かさにおいて日本とは比較にならないネパールでは、日本から持ち込んだほんのちょっとしたものがとても目を引いたりします。子どもの誘拐事件 (人身売買、移植用臓器の摘出が目的です) が発生している事もあって、子ども達の安全を確保するためには、目立たぬ事、地元並みである事が非常に重要であると考えております。

またこれはとても微妙な問題ですが、何かことが起こった時に、そのストレスの矛先がマイノリティーや弱い立場の人に向かう場合があります。TCP の現地施設は、加藤を除けば全員がチベット亡

命者です。国を逃れ、ネパールに間借りさせていただいている身分です。ここ数年、ネパール国内の政治が混乱し、物価も急上昇して、国民の生活は目に見えて苦しくなっています。また今年のような大きな危機が何度も起こるような情勢の時に、自国民以上に難民が恵まれた暮らしをしていては、周囲から不満が起こるのは当然のことと言えます。

このような理由から、TCP は「地元並みであること」「地元の方々との良好な関係性を作る取り組み」に力を注ぎ、努力と注意を払って運営をしております。子ども達自身の安全のために、クンデ・ハウスへの持ち込み物資に関して事務局が厳しく規制をさせていただく事を、どうぞご理解を頂き、ご協力を賜りたくお願い申し上げます。

またお菓子などのいわゆる消えモノや学習に関する道具も同様です。良かれと思ってお持込を頂いても、まったく環境も状況も違うネパールでは、それが思わぬ結果を招いたりします。どうぞ、必ず事前にご相談を頂き、TCP の運営方針にご協力をお願いいたします。

ご見学のお申し込みの増加に伴い、2014 年に引き続き 2015 年も会員サポーター様以外のご見学を、全面的にお断りする方針とさせて頂き、実施致しました。引き続き 2016 年も同様の方針とさせて頂きます。

チベット難民の現状への理解の一助となればと考えて、初期には積極的にサポーター様以外のご見学も受け入れて参りましたが、クンデ・ハウスへの物資の持ち込みなどに関して正しくご理解が頂けず、またご見学者様の意図がほとんどの場合「孤児院を訪問したという思い出づくり」でした。これは子どもたちにとって良い影響を与えないため、今後も特にクンデ・ハウスへのご訪問は例外なくお断りする方針です。サポーター様のご親族、ご友人の場合は、どうぞ事前に事務局にお知らせを頂きます様にお願い致します。

細かな点にまで、様々な規制を設けさせて頂いておりますが、趣旨をご理解いただき、ご協力を賜わりたくお願い申し上げます。

また昨年の運営報告書でもお伝えしたクンデ・ハウスの増床ですが、今年の運営目標として定める事はしませんが、引き続きこの件については検討し、時期を見て具体化したいと考えております。

TCP は孤児院としての運営許可をネパール政府から受けており、年に一度、教育省の監査を受けております。本来、ネパール教育省は孤児院の施設規定に「男女の部屋を別棟にすること」を定めております。これに関しては毎年是正の注意は受けておりますが、これまでは子ども達の年齢が小さい事、男女の寝室をフロアー別で分けている事などに免じて、強制力のある指導は受けずにおります。

男女別棟が実現できるようなさらに広い物件を探して引っ越すという事は、孤児院であるという事だけで物件の賃貸が難しい現状に加えて、ここ数年、賃料がうなぎ上りで貸し手が有利な状況を考えると、非常に難しいです。現在の建物のオーナーは、経済的に裕福な海外在住のネパール人であり、長期の契約にも応じて頂き、様々な入居時の契約が確実に履行されるという、これまでにない安心感と信頼感があります。そのためこの関係性を維持しつつ、プレハブのような簡易な建物の増築により、男子用の寝室を作ることで対応したいと考えております。

実際に 2014 年に一度、建物の見積もりを取ったことがあります。やはり大きな金額になるため、慎重に実行のタイミングを検討しようと見合わせましたが、年長女子が思春期に入ったこともあり、法的な規制も考えて、実行に向けて具体的に取り組む時期だと考えております。またこの増床に伴って、数名の孤児の引き取りも可能になると考えています。

2015 年はネパールにとって忘れがたい 1 年となりました。4 月の大地震に続き、9 月に公布された新憲法に絡んで、これほどの混乱が起こる事は本当に予想外でした。またインドの経済制裁による激しいネパールの困窮ぶりが、ほとんど世界のメディアに取り上げられない事も大きな驚きでした。

しかしこのことによって改めて、ネパールという国の立地や立場の危うさについて認識させられました。ネパール国民は現在のところ、その忍耐強さで何とかこの状態を耐え忍んでいますが、どのように生活のモチベーションを維持して行くのかが、大きな課題となっています。復興の道筋が全く見えない為、以前にも増して若い労働力が海外に流出し、国内が疲弊する悪循環にも陥っています。この様な閉塞感に満ちた雰囲気は、時に潜在的な不満を表面化させる切っ掛けとなります。難民という立場であるという認識を忘れず、国に寄与できる事は協力し、ネパール社会に馴染み、今後も堅実にプロジェクトを推進して参りたいと思います。

ネパール緊急支援のご報告

4月25日11時56分にカトマンドゥの北西77Km、カンダギ県ゴルカ郡を震源とするMw7.8の地震が発生しました。甚大な被害を出したこの震災に対して、TCPはネパールに拠点を持つ団体として何ができるかを考え、「ヒマラヤ眼科耳鼻科医療を支援する会(EArTH)」と共同で緊急支援を行いました。

4月27日から募金を開始し、6月末日までに集まったご寄附は600万円を超えました。

TCP会員の皆様も、いつものサポートに加えて篤志をお寄せ下さったり、家族やご友人に寄付を積極的に呼びかけて下さったり、ご協力を頂きありがとうございました。

収入	6,055,217円
支出	6,049,254円
合計	5,963円

現地大学病院と連携し医療を提供

山岳部の仮設テントでの医療提供

大規模な食糧支援

支援が行き届かない地域への給水

被災地に派遣した食料支援チーム

避難する人達への食事の提供

被災地域での不明者の捜索

物資の支援を受ける長い行列

支出内訳

(ネパールでの支出：地域別)	
バグマティ県カブレ・パランチョーク郡、シタパイラ郡	2,431,882円
バグマティ県ラスワ郡	984,247円
バグマティ県シンドパルチョーク郡	636,466円
ガンダキ県ゴルカ郡	536,988円
サガルマタ県コタン郡	394,356円
サガルマタ県オカンドゥンガ郡	232,816円
その他の地域(コシ県ボジュプール郡、ダウラギリ県ムスタン郡など)	240,305円

(日本での支出)	
テント購入	592,194円

・収入は、TCPとEye Association For the Himalayanにお寄せ頂きました義援金の合計金額です。
・支援活動の内容は、医療、医薬品、飲料水、食料、日用品の提供です。この他にも、支出を伴わない活動(救援、ガレキ除去)を行っております。
・為替のレートを、Rs.1＝¥1.25で計算しております。
・募金は全てEyeAssociation For the Himalayanに集約し、会計上の支出もEyeAssociation For the Himalayanより行う形としております。

支援活動を行ったTCPとEArTHのチーム、関連団体

- タングクリニックナモブッダ
- タング寺院僧侶、尼僧
- ルンビニメディカルカレッジ
- ネパールアイホスピタル
- ナバジョティアイクリニック
- クンデハーバルクリニックと有志のチベット人医師
- ナガールジュナ高校
- シュリーマンガルディップ学校
- デリバザールロータリークラブ